短編横丁

友野久遠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

短編横丁

【Nコード】

N7891G

【作者名】

友野久遠

【あらすじ】

「ショートストーリーストリート」から改題しました。超短編小説集です。エッセイ、ホラー、コメディ、色んな所から引っ張ってくる予定です。ショートショートじゃないので、落ちがついているかどうかはわかりません。暇つぶしにどうぞ。

(1) 残業漬けの愛しい人へ

うわーヤバ!

ヤバイヤバイ! ねえチーフどうしよう。

えッ。なに。

遅いぞって。

遅いもクソもあるもんですか、今さら何モンク言ってるんですか。

そりゃ遅いですよどうせもう3時近いじゃないですか。夜が明けちゃいますよ。

こんな夜中まで残業やってる会社が他の何処にあるんですか。時間のこと言っても全然説得力ないってんですよ、怒りますよホントに。

もお。

ほんとねえ、男の人はどうか知らないけど、嫁入り前の娘にこんな時間まで仕事させるなんてって、うちの親なんかカンカンですからね。

営業の小西さんにも言っついて下さいよねえ、あんまり酷い仕事取って来るなって。

なんで1週間で360ページもんのパンフ引き受けますよ?

チーフだって、もう何日机に張り付いてんですか。

お尻と椅子が同化してそのまま化石になりますよ。

「5分でもいいから横になって寝たい」はいはい、でもその前にお風呂ですよ。今日みんな臭かったよ。

今朝、「おはよーございます」って来たら、男性社員全員並んで歯磨きしてたからぶっ飛びましたよ。

まあ、さすがに今夜は他のみんなは帰ったんですね。
よかった。

え？ああ、コッチの話。

あ、だからだから、何がヤバかったかっていうとですね。

あたし今、家へ帰って来たじゃないですか。

車で戻ってくる途中眠くなっちゃって、いつのまにかウトウトして、センターライン超えちゃって。

ははは、はは、時間が時間だから対向車いなかったんですけどね。
ものすごいびっくりしましたよ。

チーフも寝不足なんですから、運転気をつけてくださいよ。

で、ね、これ。

今、家から取ってきたんですけど。

はい、どうぞ。

何って、プレゼントですよ。チーフ今日お誕生日でしょう？

あーって、忘れてたんですか。

まあ無理ないですけどね、忙しいですもんね。

へへへ。あと1歩で30ですね、オヤジだね。

机とセットの生活だから、すぐ腹も出るだろし。

こんな3流会社で広告デザインなんて籠った仕事してたら、嫁さんも来にくいし。

あれー？ずいぶん謙遜ですねえ。

ホントかなあ、陰じゃずいぶんモテてんじゃないですかあ？

ほら、渡辺女史とか仲いいじゃないですか、いいセン行ってんじゃないんですか？

あの人、今日騒いでましたよ、「生理が止まっちゃった！」って。
仕事のし過ぎって言ってたけどホントかなあ。

チーフが止めたんじゃないか疑惑が浮上してんの、知ってます？

え。あはははは。

そんな暇あったら寝るって。

まあそつか。横になった途端、爆睡ですかあ。確かにねえ。

そんならあたしも、もっと早くアタックしとけばよかったかなあ。勇気が無くてグズグズしてて損しちゃった。

え？なんでそんな顔して見るんですか。

知ってたでしょ、あたしの気持ち。

チーフのこと、好きです。

ホントですよ。

今日はわざわざその為に、みんなが帰るの待ってたんです。

だから一旦家へ帰って見せたりして、苦労したのに。

チーフはいつもあたしをかばってくれて。

あたしドジで仕事も遅いし、社長にしょっちゅう頭ハタかれててチーフいなかったら、とっくの昔にクビになってますよ。

感謝もしてるし、…好きなんです。大好き。

冗談じゃないんですったらー！！

も、冗談言ってる場合じゃないんですよ、時間無いですから。

あたしもう行かなきゃならないんですから。

ホントはね、プレゼント渡して、今夜抱いてくださって、大胆発言に及ぶ予定だったんですよ。

だからお風呂まで済まして来たのに、台無しですよ。

台無し。だって血だらけですもん、ほら。

えッ、何驚いてんですか。

だから言ったでしょ、センターライン超えちゃったって。対向車はいなかったですよ。

ガードレール。激突がっちゃんこですよ。

うん。ほら今、救急車走っていきましたけど、あれに乗ってるんです。

体は乗ってるんだけど、もう手遅れなんです。

チーフに告ってからじゃないと、死ぬ気になれませんからね。

あ、そんな逃げないで下さいよ。

大丈夫、もう行きますから。

もう消えちゃいますから。

ほら、だんだん消えてくでしょう。

…ほら…

…ね…。

…ああ…損したなあ…

………

(1) 残業漬けの愛しい人へ(後書き)

バブルの頃は、いつ帰れるかわからない勤務をえんえんとやってましたね。今時はこんな会社、ないと思いますが。

(2) 人ごみの穴

信号待ちの交差点。

ぎゅうぎゅう詰めの人混みは立錐の余地もなく、私はかろうじて歩道に足だけ乗せている状態だった。

もうちょっとどうにかなる場所は空いてないのかと、歩道の上を視線で舐めまわした。

そして、見つけた。

歩道のほぼド真ん中に、ぽっかり人ひとり分、誰も立っていない空間がある。

そこだけ、人ごみに穴があいているのだ。

水溜まりでもあるのか？

上から水滴でも落ちてくるのか？

目を凝らして見たが、理由がわからない。

私の方は歩道からおっこちそうだったので、その穴の中に立ってみることにした。

苦労して移動して、そこに入ってみた。

やはり何か特別な場所ではないように思える。

すぐ前に立っているのは、高校の制服を着た男の子と、母親らしい女性の二人連れ。

どうやら転校初日であるらしく、職員室でどう挨拶しろだのという、少々くどい注意事項を並べ立てる母親の声が聞こえた。

ところが、同時に下の方では異常な事態が起こっていた。

詰め襟を着た高校生である彼女の息子の手は、母親のお尻を熱心になで回していたのだ。

ただサワサワなのではなく、もっとうごう……。いや、表現す

るのは避けよう。

く。電車の中で痴漢がやるのと同じ手つきだった、とだけ言ってお

私は動転した。

親子に見えるが、ひよっとしてパトロンとツバメさんとかそういうカップルか？

でもどうしたってそんな風に見えないんだよなあ。

私のお腹の前あたりでサワサワぐいぐい動く高校生の手。

面白くもなさそうにくどくど話を続けるふたりの顔。

ふたつのアンバランスな情景が頭の中でつながらない。

交互に見比べること数分。

そしたら！

なんと、私の前にも、あの「穴」が出現したのだった。

そう、後方の方が観察のための距離を取ることで、自然に発生した穴だったのである。

今考えても、あの二人の関係は謎である。

(2) 人ごみの穴(後書き)

これはエッセイであり実話です。

(3) ストレス解消法

“もうこれ以上家事ばかりしていると気が狂いそうなので、出て来ます。”

将太はよく寝ているので、朝まで寝かせておいてください。

気が向いたら帰って来ます。

探さないでください。

(由布子)

残業でくたくたになって家に戻った隆司の目が、テーブルに置かれた書置きに釘付けになったのは、深夜1時のことだった。

一瞬何が起こったのかわからず、隆司は便箋を取り上げて3度読み返した。

…家出か？

文面からは、ちょっと気晴らしに出るのか、何日も帰ってこない予定なのか判断がつかない。

一体いつから出ているのだろう。2歳になる将太は8時には寝かされるから、それから直ぐだともう5時間になる。

いや、台所も洗濯物も片付いている。将太が寝たあと、これだけの片づけをしてから出たのなら、10時か11時頃だろう。

もちろん、10時を回ってもコンビニやファミレスが開いているし、ゲームセンターなどで気晴らしをしていることは充分考えられる。

大丈夫さ、と自分に言い聞かせながら、隆司は水道の水をコップに一杯、飲み干した。

ストレスは溜まっているだろう、それは確かだ。

やんちゃ盛りの将太は、毎日公園で遊びたがる。由布子は1日の大半を日盛りの公園で過ごし、帰宅するや洗濯物を取り込み、将太をテレビでごまかしながら大急ぎで夕食を作る。

先に将太の食事を済ませると、自分の食事はそこそこに、将太を風呂に入れ、添い寝して寝かせ、自分は布団から這い出して洗濯物をたたむ。そのあとアイロンかけに繕いものだ。

由布子が寝るのは毎晩1時か2時で、朝は隆司の弁当を作るため6時には起きている。

考えて見ると、由布子の起きている時間はすべて将太と隆司のための家事育児に費やされている。毎晩残業と付き合いで遅くなる隆司は、ほとんど育児参加をしたことがない。

「首のところに石鹸がついてる」

洗い残しの白い泡を指摘してやったのは、一昨日だったろうか。

「風呂で流し忘れたのか？ちゃんと洗えよ」

何気なく口にした言葉だったが、由布子はむっとした表情になった。

「あたしはこの2年間、自分の体をゆっくり洗ったことなんてないわよ！」

言い放つと、その場で服を脱ぎ捨てて、風呂場へ飛び込んだ。

ストレスは溜まっていたはずだ、タベもそうだった。

会社の健康診断で、メタボリックとコレステロール過多との注意書きをもらって帰った隆司は、由布子にこう言ったのだ。

「もつとヘルシーな食事を作るように奥さんに言っただけさ。さ。」

ほら、うちはカレーとかハンバーグみたいなものが多いだろ。

子供がいるとどうしても子供中心の食事に偏りがちだけど、そこを

注意して、もつと煮物や焼き魚を増やして、炒め物を減らしてさ」
隆司にしたら、医者と言葉をそのまま伝えただけのつもりだった。
しかし由布子には家事にモンクをつけられたと感じられたのだろ
う、そのあとずっと不機嫌だった。

そうだ、そしてあれは今朝のことだった。

隆司のベッドサイドを片付けていた由布子が、大量のスナック菓
子の空袋を発見して、

「なにこれ」

と見せに来たのだ。

「コレステロール云々を言うなら、間食くらい我慢したら」

「そう言うなよ、仕事終わって唯一のストレスの解消法なんだぜ」

「あなたって、自分は何もしないくせに、あたしに課題ばかり
増やすのね！」

由布子は菓子袋を放り出してキッチンへ行ってしまった。

その時は、何だか機嫌が悪いなと思ったただけだった。生理中だっ
たかな、くらいの意識だった。

由布子の仕事には終わりがないことも、煮物や焼き魚だと将太が
嫌うので、一品でも別メニューを増やしてやらないといけなくなる
とか、そういうことは考えていなかった。

（帰ってこないんじゃないだろうな）

心配になった隆司は、由布子の携帯に電話を入れたが、いくら鳴
らしても出なかった。

何をしてるんだろう。

まさか本当に家出。

まさか発作的に何か大それたことをしたり。

いても立ってもいられなくなり、由布子の実家に電話をした。夜
中で悪いと思っただが、非常事態だ。

寝ぼけた声で出て来た由布子の母から、彼女が来ていないことを知らされると、ますます不安がつのり、由布子の姉や友人達を片っ端から電話で叩き起こした。平謝りでとにかく探してるんだと伝えただ、誰も由布子の行方を知らなかった。

もしや、その辺の公園で首でも吊っているのではないのか。

悪い方向へ考え始めると、とめどなく妄想は広がり、隆司は車のキーをつかんで家を飛び出した。

「生きていてくれ、気のせいであってくれ」
叫びながら車を走らせた。

近所の公園を手当たりしだい回り、コンビニや深夜営業の店もくまなく覗いてみたが、妻の姿はなかった。
汗びっしょりになって、我が家へ戻って来た。

しかし。

「お帰りなさい」

なんと由布子は家に戻っているではないか。

台所で晩酌の支度をしながら、

「ごめんね、あんまりストレス溜まつちゃったから。

どこへ行ってたって？ヒトカラよお、ひとりカラオケ！

3時間歌い続けたら声枯れちゃったけど、すつきりしたわあ。

ああ、携帯に電話くれたのね、聞こえなかったのよ」

怒鳴りつけそうになる隆司と対称的に、由布子はすこぶる機嫌が良かった。

（まさか浮気じゃないだろうな）

ホッとすると同時に、隆司の心に新たな不安の種が芽吹いてゆくのだった。

次の日の昼下がり、由布子は将太を連れて近所のファミレスにいた。

一緒にいるのは、公園で仲良くなった外遊び仲間のママとその子供たちだった。

「将太ママのご主人、ゲンバツでトップね。携帯に電話したのが帰宅から7分後、実家に連絡が10分後、姉妹親族知人友人、20分で8軒も電話して、探しに行くまでに24分しかかかってないわよ」

チェック表を見ながら、みちるママが感心した。

「搜索時間は一時間半、これもけっこう頑張ったわ。」

愛されてるのね、うらやましい。うちなんか知らん顔でお風呂入ってたわよ」

祐樹ママが恨めしそうに言った。

「そりゃ、今回はあたし、ちゃんと仕込みをしといたもの」

由布子は祐樹ママのおごりのプリンアラモードを、将太と自分の口に交互に突っ込みながら、満足そうに微笑んだ。

「おかげさまで日ごろのストレスは解消したし、おいしいものはご馳走してもらえたし、万々歳よ」

「うーん、悔しい。また来月もやりましょうよ」

みちるママがテーブルを叩いた。

「いいわよ。今度は何でやる？」

「不倫疑惑なんてどうかしら」

「あら、いいわね。仕込みのし甲斐もありそう」

「あんまりあからさまなのは反則よ」

「じゃあ禁止キーワードを決めときましましょうよ」

主婦たちは熱心に相談を始めた。

ファミレスを出たところで、

「じゃ、これは1番手のみちるママにお渡ししておくわね」

由布子は、自分の家と車の中に仕掛けてあった盗聴器をみちるママに手渡すと、翔太の手を引いて元気に公園に向かって行った。

(3) ストレス解消法(後書き)

亭主を肴においしい物を食べる。これぞ主婦の醍醐味ですわ。

(4) イケイケサイン

まだ合コンなんて言葉を覚えてばかりの大学時代の話である。

コンパじゃなくて合同ハイキングの話が持ち上がった。

この計画、じつはAという男子学生のために立てられたものだった。

Aは学園祭で私の友人M子に一目惚れし、知り合いを手繰って私に紹介を懇願したのだった。

なんとも純情な話にロマンを感じ、全面協力を約束した私たち。カップル決めのクジに細工し、まんまとAとM子をふたりきりで車に乗せることに成功した。車は全部で3台。

AとM子で一台、残りが4人ずつ2台に分乗して出発したのだが、Aは出だしから相当緊張していた。

まずスタート時点にいきなりエンスト、周りが冷や汗をかく。

駐車場から出るときにミラーをこすり、もう一度エンスト。

途中でトンネルに入り、出てきたらライトが点けっ放し。

当時はまだ携帯が普及しておらず、私たちは並走する車の中から合図してライトを消させようとした。

「おい、ライトライト」

掌をパカパカやってみんなで叫んだ。

緊張の余りさっぱり気づかない様子のAに、繰り返し手のひらで合図をした。

すると何を考えたのかAは満面の笑みを浮かべ、車を脇道に入れてあっという間にどこかへ走り去ってしまった。

「ライトライト」を「バイバイ」と勘違いしたのである。

それきり戻っては来なかった。

二人きりになってさぞかし健闘したのだろうが、その後AとM子が付き合っているという話は聞いたことがない。

(4) イケイケサイン(後書き)

これはエッセイであり実話です。
誤解は願望に起因する。

b
y
久遠

(5) 顔面崩壊

あッ、と思った瞬間、前輪が引つかかった。

後輪が跳ね上がり、自転車はハンドルを中心に一回転。

道路に投げ出されるまでが案外長かった。

手を突いて顔面強打を避けようとしたが、勢いが良すぎて役に立たなかった。

ほっぺたが地面にドッキングする瞬間はコマ送りのようで、憎いアスファルトの亀裂がしつかりと目に焼きついた。

平日の昼間だから主人は仕事、2人の子供は小学校。

私は買い物途中に自転車で転倒して顔面を強打し、救急車で運ばれた。

幸いにも骨折はなく、顔の打ち身だけだった。

そのかわり、自分でも誰だか判らないくらいに顔面が腫れ、人相が変わった。

怖いというか、不気味な顔だった。

病院の鏡で自分の顔を見て、これは子供が泣くかも、と思った。

学校から帰宅しているはずの子供たちが泣かないように、病院から電話をかけて、

「すごい顔になったから驚かないでね」

と、言い聞かせてから帰宅。

子供たちはさすがに泣きはしなかったが、なるべく私の顔を見ないようにしていた。

でも、主人の職場にまで電話するのははばかられ、知らせずにおいた。

夕方帰宅した主人。

「ただいま」と声をかけても私が振り向かないので、怪訝そうな様子。

そのうちどういっわけかイタズラ心を起こし、結婚して一度もやったことのないお茶目をやった。

後ろから忍び寄り、おどかしたのだ。

「わッ！！！！！」

「きゃッ！！！！」

驚いて振り向いた私の顔を見て、主人は床から7センチほど跳んだ。

(5) 顔面崩壊(後書き)

ちなみに救急車のおじさんには、「えらく何にもないところでこけたもんだね」と言われました。

(6) お花見列車

桜が咲く頃になると、思い出す。(こんなんばかりや)
中学校一年の、お花見遠足のこと。

私が入学したのは、新興住宅地に新設されたばかりの中学校だった。

第一回入学生が私たちだったので、何をやるのも初めてで、行事も「とりあえずお試し」的なものが多かった。

春の遠足に、一般の列車を使って花見をさせる、なんてことをやらされた。

今だったらマイクロバスなんだろうけど、そういうところが模索段階だったらしい。

結構距離があり、3時間近く列車に乗っていた。

当時、国鉄の在来線にはもれなくトイレがあった。

到着間近になってトイレに行ったら、困ったことに鍵がうまくかからない。

ガチツとロックしきらないので、手を離すと横開きのドアがカラカラと開いてしまう。

仕方がない、誰かを誘ってドアを押さえてもらおう、と思っ
て出ようとしたら、なんと後ろにすごい人数が並んでるではないか。

「早くしてくれんか！」

目が合った後続のおっさんに怒鳴られて、怖くてやめま
すと言えなくなつた。

ドアは便器の後方だ。

ドアを手で押さえてアクロバットのように下着をおろした。

でも、距離がありすぎてその恰好ではしゃがめない。
体が伸び切った状態なのだ。
四苦八苦しているうち、偶然に力チリと錠が入った。

少し甘い掛かり方だったが、今しかないと思って大急ぎで排泄。
用を足し終わった途端。

列車がカーブにさしかかり、鍵がカチャンと外れてしまうのが見えた。

遠心力でドアが開き始めるのを慌てて止める。

しかし、自分の体もカーブでドアの開く側に押し付けられることを計算していなかった。

その時のポーズは、ほぼバレエのアラベスクに近かった。

スカートは上がって、下着は下がった状態。

鍵レバーを握ったまま横倒しになり、ドアは一気に全開した。

5人ぐらい、ドアの前に並んでいた一般の乗客の前でモロ出し。
後ろに並んでいた、あのこわいおっさんとまともに目が合った。

おっさんはどういうわけか、

「あ。す、すいません」

と大声であやまったのだった。

あんたに謝って貰っても。

その後、同校で、春の遠足に列車が利用された話は二度と聞かなかった。

一般乗客に迷惑なので、と言う理由で、とりやめになったということだった。

(7) 老夫婦

「おい、そのドレッシング取ってくれ」
言ってしまったから、私は首をかしげた。ドレッシングと言うのは、風呂場で使うものだっただろうか。

「何を取ってくれって？」

脱衣場までやってきた妻が、機嫌の悪そうな声を出す。このころは歳のせいか、自分のやっていることを中断されるのをイヤに嫌うようになった。夫婦仲が悪いわけでは決してないのだが。

「あたしの聞き違いかしら。ドレッシングって聞こえたんだけど。あなたお風呂の中でサラダでも食べてるの？」

「いや、頭にかけるのが欲しいんだ」

「マヨネーズでリンスする人はいるらしいけど、ドレッシングかけるのは聞いたことないわよ」

「いや、だからその」

そんな意地悪をしなくてもいいじゃないか。名前が浮かんでこないだけなんだ。お前だって50を過ぎてるんだから、物忘れの不便さくらいわかって来てるだろう。

「頭にかけるあれを作るんだ」

「まあ。そこでドレッシングをわざわざ作ってから頭にかけるつもりなの？」

「違う違う。思い出せないんだ。頭にかけるものをお前が言ってみてくれ」

「ドライヤー？」

「お前もずれてるな」

たしかに「髪にドライヤーをかける」という言い方はするが、ド

レッシングつながりで「かける」と言ったら、普通液体を想像するだろう。わざとやっているのだろうか、それとも妻も高齢のせい
で反応がおかしいのだろうか。

「ずれてると言ったら、カツラかしら？」

「誰がずれてるものを言えと言った？ 頭に振りかける物を言うんだよ」

「増毛剤は結局買わなかったわよ。通販で買ったら損だとかあなたが言うから」

「家がないもん言っただうなるんだあ！」

「ほかに、家にあるものでずれているものと言ったら」

「ずれてるから離れる。そうじゃなくて、家にあるもので頭に振り掛けるものを言うんだ」

「シャンプー？」

「そうそう、その調子だ」

「シャンプーならそのラッコに寝てるでしょ」

「シャンプーじゃない。それに、お前はいつもこれをラッコと言ってるが間違ってる。ラックだ。ラッコは動物園にいて、貝を腹の上で割るやつだ」

「まあ。偉そうに言うなら自分の欲しいものをちゃんとおっしゃいよ。」

「リンスも髭剃りクリームもそこにあるでしょ」

「ここにあるものならわざわざお前を呼びつけたりせんだろう。」

「リンスのことじゃない。それに髭剃りクリームは頭にかけるだろう。だいいち、クリームじゃなくてこれはシェーブローションだ」

妻は風呂場の引き戸を開けて、私の姿を険しい顔で見た。

私は中で立ったまま、服を半分脱いで裸足になり、空になったスプレーボトルの蓋を開けて水道に近づけていた。

「整髪料ね」

妻が宣告した。

「お気に入りのコンディショナーに水を混ぜて、整髪料代わりに髪にスプレーしたら調子がいいって、あなたが勝手にエアークンディショナーだとか名前付けてやってるんでしよう。」

まったく、自分がつけた名前くらい覚えてなさいよね。ご飯作って忙しいのにやんなっちゃう」

妻はため息をついて、新しいコンディショナーのボトルを私の前にドンと置いて出て行った。

まったく歳を取ると、こんなことでも家族と喧嘩をしなければならぬ。

「悪かったな。ごはん、今日は何なんだ？」

機嫌取りに聞いてみた。

「かぶのミネなんたらに、魚のカルななたかっていうのをやってみたのよ。」

名前は覚えられなかったけど、味の方はなんとかなったわよ」なるほど、妻はすでに超越済みであるらしい。私もやってみるかな。

私は新品のコンなんたらのボトルのポンプをセットし、スプなたらのボトルに入った水の中に何回かプッシュしてから蓋を閉め、酒を飲ます何とかと言う店でなんとかをシェイクする誰やらのように激しくボトルを振り回した。

(8) 留守中に失礼

この事件には、マエフリのようなものがあつた。

前日の晩、主人が帰って来るなり、

「おい、玄関の鍵が開きにくいぞ。

鍵穴に差し込んでるのに回らんことがある。 ドアがゆがんでるんだらう。」

今はお前が開けてくれたが、今日の昼休み、留守の時に用事で帰ったら入れなかつた。

お前も、外から帰って来た時に困るだらう。 管理人に連絡しとけよ」

と言つていたのだ。

「わかつた、明日言つとく」

私はそう返事をしたのだが、翌朝電話すると管理人は留守だつた。

そして夕方、事件は起こつた。

買い物から帰つた時、差し込んだ鍵がどうしても回らないのだ。

ドアを持ち上げて見たり、鍵を押し気味に回してみたりして何度もトライしたが回らない。

うわーほら見る、だから言わんこつちやない！

と怒つてみても、管理人が留守ではすぐにどうしようもないのが現実。

途方に暮れて階段下を見ると、隣の部屋の奥さんが、駐車場で立ち話をしていた。

玄関前に荷物を放り出し、階下に降りて隣の奥さんに泣きついた。

「ごめん、お宅のベランダから入らせてくれないかなー！」

お隣さんは快諾してくれ、一緒に階段を登つた。 うちは5階な

のだ。

ところが、4階まで登ると、そこにさっきの買い物袋が置いてあるではないか。

それでやっと気づいた。

私は最初から、1階下のよその家の鍵を開けようと頑張っていたのだった。

(8) 留守中に失礼(後書き)

これはエッセイであり実話です。

浅田美代子さんが同様のエピソードをお持ちのようです。先日
テレビで言ってました。

(9) イケメンなぞなぞ

「ご趣味ですか」

いきなり、そう聞かれたんだそうである。

朝の通勤電車を降りる際に、それまで隣に立っていたちよつとイケメンの大学生風の男にだ。

私の友人であるその女性は、一瞬だが内心でほくそ笑んだのである。何故なら彼女は、仲間内でも有名な面食いであったからだ。電車に乗った瞬間から、なんていい男だろうかと気になって仕方なかったらしい。

しかし言んだあとに、疑問が襲って来た。

「ご趣味はなんですか」

ではないのだ。ご趣味ですか、とはどういう質問か。主語はないのか主語は。

当然ながら考えている時間もなく、友人はその男を雑踏の中に見失ってしまった。

質問しておいて返事を待たずに立ち去ったという事は、質問と見せた抗議だったのではなからうか。

隣りに立っていた間中、ちらちらと彼の顔を盗み見ていたのだから、それが気に障ったのかも知れない。

「僕の顔がそんなにお好みですか」

そう言う意味で、ご趣味ですかと聞かれたのではないかと思ったのだ。

意地の悪い男だ。友人はショックを受け、そのあと恥ずかしさに落ち込んだ。

彼女の職業は幼稚園の先生である。

普段「教師」とは呼ばれないけれど、教育者である以上、一種の聖職という見方が、世間一般にはあるのだ。その「先生」が、朝っぱらからしかも出勤途中に、男の顔に目を奪われて本人の不興を買うなど、テレビドラマの学園ものの脇役で出て来る、色気過剰の女教師みたいで非常に恥ずかしいと思った。

こんな事ではいかん、気を引き締めて仕事につかねば。そう思った彼女は、ぐっと気合を入れた顔で職場の門をくぐった。勤務開始まで15分ある。いつもは職員室で自分のクラスのための準備などをして過ごすのだが、その朝は気合の入れ始めとして、園門の前の落ち葉を掃除しておこうと思ひ、竹箒を持って正門の前まで出た。

「おはようございます」

早々と登園して来た子供が元気にあいさつをする。

「先生、かわいいね」

「あら……斬新……」

子供と保護者のおかあさんが、ニコニコ笑って彼女の顔をのぞき込んで行った。

「おはようございます」

「あ、ほんとだ。先生かわいい」

「まあ」

「ねえママ、かわいいよねリボンが」

「あ、あら……」

その時になって彼女はやっと気づいた。

何故だか、園児たちが自分の顔をじろじろ見て、やたらと楽しそうにする。オトナの反応は、戸惑いと苦笑いに近いもののような気がする。

(今、なんて言った？ リボン？)
リボンなんてつけた覚えはない。

思わず頭に手をやる。その手をあちこち動かしてみると、ようやく問題の根源が手に触れた。

それは真ん中がつぶれたような形の、ピンクのカーラーだった。

朝、前髪があまりにも元気よく跳ね狂っていたので、一度髪をとかした後で矯正の為に付けたものだ。後で取ろうと思いつつ、すっかり忘れて出て来てしまったのだ。

確かに普通のカーラーよりはデザインが可愛らしく、見ようによつてはリボンの変種に見えるかも知れない。でも、髪の毛が巻きつけてあるのだから、よく見ればバレバレにカーラーだ。

「ご趣味ですか」

あの言葉は、「それは趣味で付けたまま歩いておられるのですか」の略だったのである。

(10) 侵入者

「しまった、寝過ごした!!」

その朝、30分近くも寝坊をしてしまった。朝日が差し込むキッチンに駆け込み、大慌てで料理を作る。

洗って切っただけの野菜サラダと果物を、ザカザカ皿に盛り付ける。

ああよかった、手間のかからないスライスハムと切れてるチーズがあっただぞ。

「パパ、朝よ。蘭も司も起きなさい」

亭主と子供の朝ごはんが辛うじて間に合い、食べさせている間に弁当もなんとかデッチ上げて、無事に家族を送り出す。奇跡の15分技、過去最短記録だった。

台風一過の後、思い切り脱力して椅子に座り込む。

ひとりきりになった途端、猛烈に空腹を感じた。

亭主と子供が食べ残したサラダを何もつけてない食パンに無造作に挟んでかぶりつく。

その時、ポトツと何か赤い物が皿の上に落ちた気がした。

かぶりついたパンの反対側の端から、赤くて長い物が勢い良く出て来て落ちたのである。

次の瞬間、私は悲鳴を上げた。

それは長さ15センチはあろうかという、ミミズに似た赤い虫だった。

いや、確かに大慌てで野菜を洗った。洗い方が足りなかったのかも知れない。

しかしそれにしあって、これまで野菜をゆっくり洗っていた時に
だって、こんな大物を見かけたことはなかったではないか。

まさかの踊り食い。 家族には言わないでおこう。

(10) 侵入者(後書き)

当分サラダが食べられなかった。

そのエキスを気づかず食べた亭主と子供に合掌。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7891g/>

短編横丁

2012年1月15日01時54分発行